発達を援助するカウンセリング活動
（第２回講演会から）

伊　藤　武　彦

発達とは、広い意味でとらえれば、物事がうまくいかなかったり、人間関係で悩んだり、あるいは、人間的に成長したりするなど人間の諸活動一切が年令的なものによって変化する、いろいろな機能も変化するということである。発達の要因について、心理学の教科書では、遺伝か環境か、生得的なものか獲得されたものかなど、２つに分けて記述・説明されることが多いが、医学の分野では、病気の原因について外因・内因・心因の３つに分けて論じられる。外因は、外的な影響、例えばサリンなどの毒物を撒かれると身体が衰弱したり死んだりすることである。内因は同じ環境であっても成人病にかかりやすい人、かかりにくい人がいるといった気質的な要因である。この３つの原因のうち、外因と内因の２つの原因は、病気を考える場合非常に分かりやすいが、円形脱毛症のような心因、つまり心が原因となっている病気については、なかなかわかりにくい。発達ということを考える場合、どういう原因や背景が考えられるかで、身体的な面、心のもち方やあり方、勉強の意欲といったようなものが規定される場合がある。もっとも、体調の悪いときはあまり感情的におもしろくないとか、ケガをして痛いとき気分がすぐれない、といった場合もある。つまり、外因・内因・心因の３つは互いに連関しあっているといえる。

1　発達における精神間機能と精神内機能

発達に関しては、我々が人間として、個人として、可能性をのばす（いろいろな可能性があり、伸ばせる状態と伸ばせない状態があるが）というふうに考えるときにどういう順序でのびるかということが重要である。「精神間機能」（ヴィゴッツキー,1962）がまず生じて、それが精神の中に移行する（「精神内機能」）のである。すなわち、諸機能は、いきなり頭の中に生じるのではなく、まず精神と精神の間、いわば本人の皮膚と他者の皮膚の間に生じる（Wertsch,1991）。発達の初期にコミュニケーションなどの共同活動つまり、乳幼児が言葉を獲得していく過程では、まさにこの順番で諸機能が獲得される。

このように人間の発達は、まず関係の中で形成される。子どもと大人が共同して活動をおこなったり、コミュニケーションをとりあっていくなかで、人間の発達は実現されるのである。このような精神間から精神内への機能の発達の移行は、言語獲得やコミュニケーションの分野だけでなく、また乳幼児期をこえて他の発達段階にも観察される現象である。青年期においても自分づくりを実現するためには、他者とどのようなコミュニケーション関係をむすぶかが重要である。カウンセリングという場も、このような精神間機能の働く場の１つとして考えることができる。

2　青年期の発達課題とコミュニケーション

人格発達について、乾（1982）・ワロン（浜田訳1982）によれば、われわれが自分の人格を

いとう　たけひこ　本学部助教授

創り、保ち、発展させていくということは、われわれの中に「他者」を取り入れることであり、その他者と対話するということが、自分が人間として人格的に物事を考えたり感じたり行動したりすることだということである。すなわち「私の中の私たち」との対話あるいは、自己の中の「他者」との対話が人格形成の基本である。このような対話は普通、最初は友達・先生・家族などの中で、おこなわれ、やがて字が読めるようになると書物を通して小説家や哲学者などの著者と対話をしていくことになり、それらの行為をすることによって、だんだん自分の中に自分としての人格ができてくる。このような対話をとおしての「自分づくり」こそ、まさに青年期の課題ととといえる。すなわち、「自分をつくる」ということは、自分の中にいろいろな豊かな他者を取り込むということである。

自分の中に他者を取り込む場合、他者とのコミュニケーションがきわめて重要である。コミュニケーションには大きく分けて「命令」、「説得」、「対話」の３つの型がある。「命令型コミュニケーション」とは、たとえば、戦前の日本の軍隊で上官の命令には絶対的に従わなければならないといったものであるが、これは相手の気持ちをそれほど考えなくても、とにかくすばやく遂行するということが大事なコミュニケーションである。しかし、民主主義社会においては、命令だけで人間を動かすことは基本的にできず、相手に納得させて行動させるということ、つまり「説得型コミュニケーション」が大切になる。その意味では、マインドコントロールも説得型コミュニケーションの１つであり、コマーシャルは最も強力で典型的な説得型コミュニケーションの例である。これら２つのコミュニケーションの型に共通しているのは、結論が予め決まっているということである。メッセージを送る側にとっては、相手がどう反応し、行動するかということが、そのコミュニケーションがうまくいくかどうかの基準となる。現在、教育学で問題になっている「ディベート」による教育活動も基本的に説得型コミュニケーションである。いかに相手を説得するか、あるいは第三者を説得するかということが重視されるからである。「対話型コミュニケーション」は命令、説得のように話し手から相手への一方向のコミュニケーションではなく、互いに双方向のコミュニケーション、いわば両者の「相談型コミュニケーション」である。

しかし、現実の青年の日常では、このような相談型コミュニケーションがうまく成立しない場合がある。青年期は孤独感や友人など対人関係で悩む時期である。たとえば、親子という人間関係についても、いわゆる第二反抗期を経て、人間関係のなかで自分自身がどうあるのかを学ぶ時期である。そして、これらの青年期特有の人格的悩みや性の悩みについて、身近な人々に相談することを希望しても、実際には容易ではない状況がある。

3　「相談型コミュニケーション」とカウンセリング

人間が人間として伸びるということにとって最も重要なコミュニケーションの型である、対話型コミュニケーションあるいは相談型コミュニケーションについては、乾(1982)は「伝えあい」という表現で、保育の理論を提起した。保母と幼児という関係であっても、幼児同士の関係であっても一方的に伝えるのではなく、話し手と相手が互いに理解をしていくということが重視される。

この「伝えあい」が行われる状況は、青年期においてもさまざまな場面が考えられる。たとえば、学生がクラブやサークルの仲間を自分の中に取り込むような時、あるいは、教師がクラスで生徒に接する場合も、良い教育的な関係においては、対話型コミュニケーション、すなわち、相談型コミュニケーションによって「伝えあい」がなされるていることが考えられる。

教育的な関係というのは実は説得ではないか、場合によっては命令ではないか、という問題がある。確かに、現在の日本の教育の体制は、いわゆる「校則」などのように非常に命令的な印

象を与えている。教育には当然、説得も必要であるが、基本的には、相談型コミュニケーションが、青年を伸ばすものとして最も望ましいのである。

このような仲間づくりとか教育場面というのは、いわば与えられた、あるいは自分が選び取って日常的な関わりの中で自分を成長させるというコミュニケーション活動を行う場である。しかし、本人が日常場面において解決の手だてが見つからなくて困っているようなとき、非日常的な場面においてこそ相談する相手が必要なときもある。そのようなときには、カウンセリングという相談活動が非常に重要なものとなる。カウンセラーには、相談者の秘密を他者に洩らしてはいけないという倫理的な職業上の守秘義務があり、個人的な問題も安心して相談できる。カウンセリング場面は、心の問題を解決するという問題解決をする場であると同時に、なおかつ相談型のコミュニケーションの場であると位置づけられる。

4　発達の環境の４つのレベルと発達の援助

上記のような相談型コミュニケーションを可能にし、青年の発達を実現するためには、本人の実際の生活や社会環境の中での位置や役割にも広く注意を払う必要がある。

このような個人の環境を構造的に把握する試みとしてBronfenbrenner(1979)は発達環境のシステム理論を提起している。ここでは大学生を例にして、このシステム理論を考察してみよう。

1)　マイクロシステム

マイクロシステムとは、当事者である学生が直接的に経験する場面の、最小単位である。たとえば、教室の中の対人関係、家庭関係や下宿・寮、友人関係など直接的な交流とコミュニケーションを媒介としたり、あるいはコミュニケーションそのものが目的となっている活動のことである。教室での授業活動も１つのマイクロシステムであり、個別カウンセリングの場合もそれ自体が１つのマイクロシステムである。

2)　メゾシステム

次のメゾシステムとは、マイクロシステム間の相互の関連を問題にするレベルである。これは、学生の学業不振の問題が、教室内の問題とは限らず、原因が日常の人間関係や寮生活の問題にある場合などを考えるとよい。この観点から援助活動におけるカウンセラーと他の教職員や地域との連携が問題になってくる。

3)　エクソシステム

さらに、学生が所属する大学の方針や運営、マスコミの影響、居住地域の自治体の政策運営など、学生自身はその場面に関わったり、変更を加えることができないが、彼らの経験や思考、行動に影響を与えるのが、エクソシステムのレベルである。

4)　マクロシステム

最も大きなシステムであるマクロシステムとは、本人をとりまく国家や社会、共同体のレベルであり、たとえば日本人の国民性や日本政府の教育政策といったことが問題となるレベルである。

これらの４つのレベルが現実には交錯しあっているにもかかわらず、伝統的なカウンセリングは、より大きなシステムに注意を向けるのではなく、本来社会や文化的な原因による問題でも、クライエントの内面的な問題に帰属させる傾向にあったといえる。しかし、社会の多様性や多文化性が認められ、マイノリティが社会的に認知されるにつれ、クライエントの持っている社会的・文化的な背景を取り上げるカウンセリング理論が生み出されてきている。

5．治療的アプローチと予防的アプローチ

学生相談に限らずカウンセリング活動を効果的なものとするためには、援助・介入の対象、目的、方法の３点を考慮する必要がある。

表1．学生の発達援助のための援助・介入活動

援助のレベル	生態学的システムの場面	活動の性質と具体例	
		(a) 治療活動	(b) 予防活動
(1) 個人に焦点をあてた援助	マイクロシステム	(1a) ●個別カウンセリング	(1b) ●健康教育 ●オリエンテーション
(2) 個人＋集団への直接的介入	マイクロシステム & メゾシステム	(2a) ●グループ・カウンセリング ●グループワーク	(2b) ●ソーシャルスキルトレーニング ●予防教育・心理教育 ●集団創造活動
(3) 個人＋集団＋社会への構造的介入の各システム	マイクロ ＋メゾ ＋エクソ ＋マクロシステム	(3a) ●紛争解決 ●集団間の調停 ●諸機関の間の連携 ●社会政策	(3b) ●集団創造活動 ●地域社会の啓蒙 ●教育計画・制度 ●大学政策の改善

つまり、カウンセリングの対象として、個人、集団、機関・地域社会のどこに援助の焦点をあてるのか、カウンセリングの目的は、治療を中心とするのか、それとも予防や開発に重点を置くのか、カウンセリングの方法として、直接的サービスが必要なのか、コンサルテーション、もしくは情報提供が効果的なのか、これら3つの視点からカウンセリング活動をとらえなければならない。

表1は学生の発達援助のための援助・介入活動のモデルを示したものである。この枠組みでは、援助・介入の対象は、カウンセリング活動で行っている対象設定を、ブロンフェンブレンナー（Bronfenbrenner,1979）の生態学的システムを参考にして、「個人」・「個人と集団」・「個人と集団と社会」の3つのレベルを想定している。これは、（1）治療的か、予防的かの活動内容の目的の違い、（2）個人に焦点を当てたのか、集団レベルの取り組みなのか、社会的なレベルも含んだ取り組みなのかの3つの援助・介入レベルの2次元で6種類の活動に分類を試みたものである。

6　介入活動としてのカウンセリング活動

個人レベルの問題：　われわれを取り巻く発達環境において、何かの問題が起こった場合、介入活動（intervension)、すなわち、中に入ってその事態を改善するための活動が必要である。もっとも重要な介入活動として、カウンセリングと教育活動が挙げられる。表1では、諸活動の目的を2つに分け、左側に治療的活動、右側に予防的活動を示している。Aの治療的活動は、失敗、悩み、葛藤、紛争という問題にそくして、問題の原因を解決したり、症状を軽減したりすることである。Bの予防的活動は、その問題が起こる前に、それを起こさせないためにはどういう教育をしたらいいのかということである。そういう意味では、マイクロシステムの治療的活動において、きわめて大事な活動がカウンセリングであるし、マイクロシステムでの予防的活動として大事なものが健康教育やオリエンテーションであるといえる。

集団レベルの問題：　集団レベルでの治療的援助として、家族療法やグループワークという方法が行われてきている。青年に対する発達援助にも、青年の様々な人間関係の調整を必要と

するものがあり、本人と同時に周囲の人を対象に介入をするのが適切な場合もある。また、学生の場合、教職員へのコンサルテーションによって間接的に働きかけるのが有効な場合がある。すなわち、本人のメゾシステムを対象に含めた介入が考えられる。問題の予防や発達的見地からも、本人の発達を側面から援助する力量を大学というコミュニティ総体で高めることも必要である。

社会的レベルの問題： 例えば、留学生の生活や経済問題の背景に日本社会に特有の異文化に対する態度が存在する場合がある。あるいは、日本の大学政策が教育条件を規定し、そのためにマスプロ教育の弊害が生じていることは、よく知られていることである。これらの社会的・文化的な問題も、学生の発達の援助という観点から取り上げることが必要である。援助者が社会に起因する問題を当人の内的な問題と取り違えてしまう「基本的な帰属の誤り」に陥らないよう注意する必要がある。とはいっても、社会問題にすべてを帰属させて、治療や援助を必要としている本人に有効な介入をしないのは問題である。

また、大学政策を学習主体である学生の観点から変革したり、留学生も含めた外国人の差別的待遇を改革するような社会的取り組みも、予防的・発達的観点から要請されよう（井上,1997ab)。

治療的活動においても、エクソシステムやマイクロシステムで問題が起こっていて原因が分かっている場合に、紛争解決のための調停とか諸機関の間の連携とか、１人１人のケアをしていくよりも、そういう人たちの原因をシャットアウトするという社会的集団的なアプローチも必要であろう。このような活動については、英米系の国ではコンフリクト・リゾリューション（紛争解決）研究として発展している。これは幼稚園のもめごとから夫婦喧嘩・国家間の紛争に至るまで同じように解決する共通の原理があるのではないかというような研究である。また、オーストラリアでは、予防心理学という用語で、学校の中での問題を未然に防ぐという課題、戦争をなくするためにはどういうアプローチが必要かというような研究がなされている。狭い意味でのカウンセリングというのは、このマイクロシステムの治療的・援助的活動に当たるが、その他、グループワーク・心理教育などを通して、あるいは、コミュニティ心理学に提唱されるように、その地域全体で問題が起こらないようにするためのいろいろな予防的活動もカウンセリングの枠組みで行われているのである。

7　カウンセリングにおける発達モデル

表１では、活動の目的・性質を表すために「治療」と「予防」という医療モデルによる分類をおこなっている。しかし、Blocher（1966）が30年前に指摘したように、カウンセリングの最終目標は人間の成長・発達を促進するという考え方へと、カウンセリングの世界は大きく転換してきている。すなわち、環境に対して、病気や欠点を克服することにより「消極的に」適応するというだけでなく、人間の可能性を発達させるという積極的な適応観に向けてパラダイムの転換がおこなわれてきているのである。表１の治療・予防という用語は発達モデルを医学用語によるメタファーとして用いられているとも考えられるのである。

ところで、カウンセリングにおける発達的アプローチを提案したBlocher(1966)の”Developmental counseling”というタイトルは「開発的カウンセリング」と訳されている。澤田(1972）は介入（intervention)の重視さに注目して、developmental counselingを開発的カウンセリングと訳することの正当性を主張している。日本語の「開発」ということばには、確かに対象に働きかけて対象をより発展させるというニュアンスを含んでいる。しかし、「開発」という単語は働きかける対象（クライエント）があくまでも主体subject（カウンセラー）に対する客体objectであって、クライエントの自律性のニュアンスが弱まるという印象のある語である。これでは、カウンセリングの主人公はクライエントであり、

援助・介入者はあくまで脇役だという側面が伝わりにくい。

「発達的」カウンセリングという表現は、自己実現する主体がクライエント自身であり、カウンセラーなどの援助・介入者はそれを援助する立場にあるという意味あいが強調される。本論文で発達的という表現をとっているのは、まさに主体は誰なのかという問題について、クライエントが発達の主体であることを基本としている。

カウンセリングにおける発達的アプローチについては、Ivey(1986,福原・仁科訳1991)の「発達心理療法」の理論が興味深い。Piaget (1952, 波多野・滝沢訳, 1967；1964,　滝沢訳, 1968) の発達段階論をマイクロ・カウンセリング技法に応用展開して、カウンセリング心理学と発達心理学の結合を図った試みである。この理論は, 5年後のIvey(1991)によって発達心理療法（DCT: Developmental Counseling and Therapy)と改称され、モデルの具体的な応用例が示されている。Piaget (1952, 波多野・滝沢訳, 1967；1964,　滝沢訳, 1968)によれば、人間の認知発達は感覚運動的段階・前操作的段階・具体的操作の段階・形式的操作の段階の4つに区分している。これに加え、Ivey(1986,福原・仁科訳1991）は第5の段階として弁証法的気づき行為の段階を提案している。このように、発達理論をカウンセリング実践と関連づける試みは、今後さまざまに発展していくことが期待される。しかし、実際問題としては、発達心理学とカウンセリング心理学のギャップは未だ大きい。これは発達援助を志向するカウンセリング心理学にとっても不幸なことであるし、発達心理学にとっても（発達的介入を発達理論の中に位置づけられないとすれば）検討すべき課題である。

最近、発達臨床的アプローチという言葉が聞かれるようになった。臨床的な働きかけと発達的変化の相互関係が今後更に追究される方向が多くの研究者に共有されてきた。その際、上に述べたように、「介入」「開発」「教育」「援助」という専門家からの発達主体に対する働きかけと「発達」「自己実現」「主体形成」という発達主体であると同時に援助・介入の対象である個人の発達をどうとらえるかが問題になってきている。

7　まとめ

以上、カウンセリングとは発達援助活動全般の中での重要な構成部分である事を述べた。カウンセラーの側からも役割の多様性を認める議論が提起されてきている。例えば山本(1986；山本・原・箕口・久田,1995)は臨床活動を地域を対象として行うことを「コミュニティ心理学」の課題としている。また、Atkinson　*et al.*(1993)は多文化カウンセリングにおけるカウンセラーの多様な役割のモデルを提起している。カウンセリングというコミュニケーション行為を相談室の中のものとしてだけでなく、広く社会的文脈の中でとらえていくという共通認識が今後広がっていくと思われる。

【文献】

Atkinson,D. R., Thompson, C. E., & Grant, S.K. 1993 A three-dimensional model for counseling racial/ethnic minorities. *The Counseling Psychologist,* 21, 257-277.

ブラッカー,D. H. 神保信一・中西信男（訳）1972 *開発的カウンセリング.* 国土社
(Blocher, D. H. 1966. *Develop-mental counseling.* New York: Ronald Press)

Bronfenbrenner, U. B. 1979. *The ecology of human development.* Cambridge: Harvard University Press.
（磯貝芳郎・福富　護（訳）1996 *人間発達の生態学：発達心理学への挑戦.* 川島書店）

井上孝代（編）1997 a *異文化間臨床心理学序説.* 多賀出版

井上孝代（編）1997b *留学生の発達援助.* 多賀出版

乾　孝　1982 増補改訂・伝えあい保育論集.　新読書社

Ivey, A. E. 1986 Developmental Therapy: Theory into practice. San Francisco: Jossey-Bass
(福原真知子・仁科弥生訳1991 *発達心理療法：実践と一体化したカウンセリング理論.* 丸善)

Ivey, A. E. 1990 *Developmental Strategies for Helpers.* Microtraining Association

ピアジェ, J.　波多野完治・滝沢武久（訳）1967 *知能の心理学.* みすず書房. (Piaget, J. 1952 *La psychologie de l' intelligence.* Paris: Librairrie Armand Colin)

ピアジェ, J.　滝沢武久（訳）1968 *思考の心理学.* みすず書房
(Piaget, J. 1964 *Six etudes de psychologie.* Geneve: Editions Gonthier)

澤田慶輔 1972 序：解題を兼ねて. ブラッカーD.H. 神保信一・中西信男（訳）1972 *開発的カウンセリング.* 国土社,1-2.
(Blocher,D.H.1966.*Developmental counseling.* New York: Ronald Press)

ヴィゴツキー, Л. С. 柴田義松（訳）1962 思考と言語（上・下）明治図書
Выготский, Л. С. 1934 Мышлен ие и Речь

ワロン,H　浜田寿美男（訳）1983 *身体・自我・社会.* ミネルヴァ書房

Wertsch, J. V. 1991/ 1995 *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action.* Cambridge, MA: Harvard University Press.
田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子 (訳1995)
心の声. 福村出版

山本和郎 1986 *コミュニティ心理学：地域臨床の理論と実践.* 東京大学出版会

山本和郎 1995 コミュニティ心理学的発想の基本的特徴. 山本和郎・原　裕視・箕口雅博・久田　満（編）*臨床・コミュニティ心理学：臨床心理学的地域援助の基礎知識.* ミネルヴァ書房. , 18-21.